



哀しい常識

大学などの研究機関が軍事研究に手を染めてよいかどうか、が問題となるのは世界中を見わたしても戦後の我が国だけのようだ。占領下の一九五〇年に、学者の総元締めとされる日本学術会議は、「戦争を目的とする科学の研究には絶対従わない」との声明を出した。占領軍の強い圧力下だったし、戦争の悲惨を経験したばかりだったからこの声明は理解できる。同会議は一九六七年にも「軍事目的の科学研究を行わない」との声明を出した。その頃、院生だった私は数学に集中して政治には無関心だったから、構内の「軍学共同を許すな」の立看板を見ながら、「それにこしたことはない」くらいにぼんやり考えていた。

先週、同会議は五〇年と六七年の二つの声明を継承すると発表した。防衛省による研究費助成の公募が始まったためだ。これに大学の研究者が参加すると、防衛省や政府による研究への介入が強まり学問の自由がそこなわれるという理由らしい。腑に落ちない。防衛省の研究に応募するか否かはあくまで個人の自由意志によるものだから、「防衛省の介入」ではなく「研究者個人の防衛省との協力」にすぎないのだ。学問の自由とは無関係な話である。それより何より、時代認識を余りに欠いている。前回の声明はちょう

と五十年前で、極東に地政学的緊張はほとんどなかった。それが今や、北朝鮮は核ミサイルで日本など周辺国を脅し、軍事大国となった中国は南シナ海を国際法に反して占拠し、尖閣諸島などのある東シナ海までも自分のものにしようとしている。世界の警察として君臨していたアメリカは往年の力を失い、「もう世界の警察はやめた」と米大統領までが宣言した。戦後、今ほど国防、とりわけ自主防衛力の向上が望まれる時はないのだ。

その上、理工系の研究の大半は軍事に転用できると言って過言ではない。応用科学は無論、理論科学だってそうだ。相対性理論は核爆弾につながったし、量子力学は半導体につながり、エレクトロニクスに、そしてほぼ全ての現代兵器につながっている。民生と軍事との線引きは不可能と言ってよい。純粹数学のように無用と思われるものでも軍事に役立つ。ケンブリッジ大学の数学者アラン・チューリングは第二次大戦中、英国におけるエニグマ暗号解読の司令塔だった。英国に向かう船舶がドイツの無制限潜水艦作戦により毎月数十万トンも撃沈されたため、英国は武器、弾薬、食糧の厳しい欠乏に見舞われた。チューリング達数学者の必死の努力による暗号解読のおかげで、護送船団は潜水艦を回避できるよ

うになり、英国は降伏寸前の危機を乗り切ることができた。置換群論が役立つ。チューリングはその過程で、戦前に自らが著した数学論文の具現化として世界初のコンピュータを製作した。人類史上最大の発明と言ってよいコンピュータは数学の軍事目的での研究により生まれたのだ。「数学者によるエニグマ暗号解読は大戦を少なくとも二年は短縮した」と歴史学者のヒンズレー卿は述べている。数百万の生命を救ったということでもある。チューリング達数学者の軍事協力は許されないものなのか。祖国を守るために国民の一人一人が全力をつくすのは美德ではないのか。今般の声明は、平和愛好を高らかに謳っただけのものだ。平和を高らかに唱える人は自らを高邁な人道主義者と見なし自己陶醉すると同時に、そうでない人を軍国主義者と見下す傾向がある。しかしこの世界に、自分が、愛する家族が、友人が、砲弾で切り裂かれる戦争を好む者など一人もいない。人を殺す組織である軍隊、人を殺す道具である兵器を充分に保有することだけが戦争を未然に防ぎうる、というやるせない現実があるだけだ。それが人類の余りにもむなししい姿であり、哀しい常識なのである。日本学術会議の浅慮と無邪気な声明には落胆させられた。